



1988年(昭和63年)
9月号(No. 519)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 「街の子」の歌の系譜
横田敬一……………(1)
シヴァ峯遠征隊雪上訓練
婦人懇談会……………(2)
海外の山……………(3)
「女性たちの夏」
「カーター氏を迎えて」他
会員名簿発行についてお願い他…(4)
三国友好登山隊祝賀会……………(5)
図書紹介……………(7)
「知床を考える」「空撮・世界の名峰」
「北海道自然100選紀行」他
東西南北……………(8)
報告……………(11)
婦人懇談会、フィルム委、
福岡支部より
追悼……………(12)
「大島永明先輩を偲ぶ」
「森谷周野君のこと」
ルーム日誌・会員異動……………(13)
新入会員・会員住所変更など……………(14)
お知らせ……………(15)
図書委、集会・自然保護委、
フィルム委、秋田支部

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテブ電話

234 六六五九

「街の子」の歌の系譜

横田 敬一

(会員番号二二二五)

昭和十一年夏、二高山岳部の二年部員であった森(旧姓桑田)欣吾氏は、先輩で東大山岳部員の三宅輝海氏の紹介で東大の剣沢合宿に参加した。合宿には釣田正哉、小寺五郎、小山義一の諸氏が参加していた。森氏は八月三日天狗小屋で東大山岳部で歌われていた山の歌を教わった。釣田氏が小寺氏かのどちらからかと森氏は記憶している。その山の歌は二つのメロディーからできていたが一続きの歌として習ったという。最初の歌が「街の子」で、あとの一つが「雪山讃歌」である。同年秋、蔵王山に二高の清溪小屋が建設され、十二月にスキー合宿が行なわれ

た。森氏は早速、夏に仕入れた山の歌を合宿で披露し、その後はこの一続きの歌が山岳部の部歌代わりに歌われるようになった。

「街の子」の歌は「そんなにお前はなぜ嘆く」の歌だといえどなにもご存知であろう。昭和十二年に二高に入った私は一年先輩の原一郎氏から、この歌はシュミットボン原作、森鷗外訳の戯曲「街の子」に出ていることを教わった。翌十三年五月十四日、私たちは二高山岳部員は大挙して山形高校のコーポルトヒュッテに押し掛け山高山岳部との交歓コンパに臨んだ。コーポルト会編「コーポルト―その五十年―」

はヒュッテンブーフ抜粋の中で、その夜のことを「コーポルトの御神酒を頂戴して快適に駄乗り唄いそして満月の月光の本にストームで乱舞し一夜を青春の焰と化さしめた」と伝えている。その夜二高側が歌ったのが「街の子」と「雪山讃歌」で、このとき以来山高山岳部でも二つの歌が一続きの歌として後輩に歌い継がれることとなった。同じ年の夏、秩父生まれの中村一男氏と奥秩父を縦走した。山行の前日、中村氏と旧知の清水武甲氏に会い、清水氏が秩父高女の山岳部に同行して私たちと同じコースを歩くことを知った。女学生の一行が先行し、十文字峠を超え梓山に出て、金峰山の登りにかかった所で私たちが追い付いた。金峰山から国師、甲武信、破風へと私たちは山の歌を歌いながら女学生たちの前に

なり後になりして尾根道をたどった。その夜二高側が歌ったのが「街の子」と「雪山讃歌」で、このとき以来山高山岳部でも二つの歌が一続きの歌として後輩に歌い継がれることとなった。同じ年の夏、秩父生まれの中村一男氏と奥秩父を縦走した。山行の前日、中村氏と旧知の清水武甲氏に会い、清水氏が秩父高女の山岳部に同行して私たちと同じコースを歩くことを知った。女学生の一行が先行し、十文字峠を超え梓山に出て、金峰山の登りにかかった所で私たちが追い付いた。金峰山から国師、甲武信、破風へと私たちは山の歌を歌いながら女学生たちの前に

が、雁坂を経て栃本に下るころには女学生たちはすっかり二つの歌を覚えてしまった。昭和十五年春、東大に進んだ私は、もしや「街の子」の原書があるかと図書館

きみたいに。友は皆年老い再び氷や岩場に近よる事も出来なくなり歌さえも忘れてしまいました」

今は故人となられた西脇氏が切ない思いをされた「そんなにお前はなぜ嘆く」の原曲の手がかりを私はまだつかんでいない。
(五月二十九日記)

シヴァ峯遠征隊

雪上訓練報告二題

婦人部の海外遠征が八年ぶりであった計画されたのは昨年の春でした。

田部井淳子隊長、高本信子副隊長以下十三名のシヴァ峯登山隊と、黒石恒隊長以下九名のトレッキング隊が編成されました。

準備とトレッキングに追われる私達のために松永敏郎氏と小林政志氏は、お忙しい時間をさいて雪上訓練の講師を快く引受けて下さいました。

富士山の訓練に引続き剣岳での訓練と再度のご指導、本当に有難うございました。基本技術の歩くことから始まって滑落停止、器具の使い方とこと細かなご指導をしっかりと守って無事登頂出来ますことを祈っています。

今日(八月十日)はシヴァ峯登頂の予定日です。

(熊谷とも子)

海外の山

女性たちの夏

日本から持ち込んだ一・五トンの装備、食料に、スカルドで仕入れた現地食をあわせると、二トンの荷物だった。百九十三人のポーターが二週間かけて五千二百回のベース・キャンプまで運んだ。

キャンプは、C1・六〇〇〇、C2・六六〇〇、C3・七四五〇の三カ所。初めは四つか五つのキャンプを考えていたが、中間地点にデポ地を設け、節約した。隊の名は、日本女子ガッシャブルムII峰登山隊。橋本しをり隊長以下十一人のメンバーのうち、登攀隊員は八人、ルート工作はしない、荷上げ要員のハイポーター三人が行動を共にした。

ガッシャブルムは、土地の言葉で「輝く壁」を意味する。バルトロ氷河最奥に馬蹄形に位置する六つの山群の総称で、コンコルディアから正面に望むIV峰西壁の威容から、そう名づけられたと言われる。その山群で二番目に高いII峰(八〇三五)を「女子登攀クラブ」に所属する十一人は、きわめてオーソドックスな極地法でめざした。

八月八日午前六時十五分、C3をいずれも三十代の橋本隊長、安原真百合、木村文江、柳沢伸子、北川みはる、それにハイポーターの一人が出発、午後一時二十七分にはそろってピークに立った。十五分間、てっぺんにいて、四時にはC3に戻った。

ルートは困難とは言えなかったが、合計千五百メートルのフィックス・ロープを張ったの慎重な登頂だった。行

動中は使わなかった酸素も、C3での睡眠時には吸った。

一九五六年、オーストリア隊が初登頂したこの山は、比較的登りやすい八千峰として、各国の多くの登山家を集めている。女性隊と前後して今年もいくつもの国からさまざまなパーティーが入り、結構賑やかだったらしい。

しかし、八千という高さ自体は危険を伴うものである。今回もフランス隊とアメリカ隊でそれぞれ死者が出た。

女子登攀クラブの田部井淳子らがエベレストに登った一九七五年八月、ポーランドの二女性、ハリナ・クリューガー・スィロコムスカ(一九八二年、K2女性隊に参加中、死亡)とアンナ・オコピンスカがやはり自力でこの山の頂上に立っている。

その後のヒマラヤ登山の推移を見れば、日本の十一人の女性がやったことは、さして特筆に値しないかもしれない。しかし、自身のペースでここまでやれることを実証してみせた意義は大きいだろう。八千峰に一度に五人の女性が立ったのは、初めてである。

七月には名古屋の遠藤晴行・由加夫妻がナンガ・パルバット(八一二五)に無酸素で登った。ディアミール壁からで、二十二歳、登山歴もまだ浅い夫人は日本人女性として初めて八千の無酸素登頂をやったことになる。エベレストを無酸素で登った夫のリードがあったとはいえ、驚異的な強さである。

この夏の日本女性の活躍は鳴り物入りでないだけ、すがすがしい。

(江本嘉伸)

—富士山雪上訓練の報告—

末吉 祐子

新宿を離れるとやがて白い富士が姿を現わし、山桜に目を奪われつつバスは走る。

去る四月十六日から十八日の二泊三日、婦人懇談会主催の雪上技術訓練が富士の裾野で行なわれた。講師に松永敏郎さん、小林政志さん、以下十九名のフラウが参加した。各界活躍中の参加者に代わって、入会もない私が報告係となった。

バスを降りても初めて会う人が殆どで、インドに行く人さえはつきり解らなかつた。新五合目は手前数キロが閉鎖中で初日は天場まで歩荷である。道道隣を行く人が同じ出身高校であったり、大学の先輩であつたりして、日本が狭いことが証明された。四国で生まれ北海道に移り住む私には、遠くの山脈が北岳であることすら教えられて始めて解ることだ。

雪上訓練は歩き方から始まり、最後には、ユマールなるものを使ってみるといった幅広い内容で、富士山頂に行きたい気持ちを返上して基本技術の講習を受けた。

歩き方、滑落停止練習を重視される松永講師の指導は、私のようなビギナーには貴重な体験となつた。また自分

海外の山

H・アダムス・カーター氏を迎えて

海外委員会

本年六月四日(土)午後四時より、集會室で「スライドの会」(出席者二五名)、ルーム隣のテレビの泉でレセプション(出席者一八名)を、カーター氏を迎えて開いた。司會は吉田宏、早川榮二両委員が行ない、当日の報告を吉田宏委員にお願いした。



H・J・カーター氏 (ルームで)

吉沢一郎名誉会員と二十有余年にわたる親交がありアメリカン・アルパイン・ジャーナル(AAJ)の名編集長アダムス・カーターさん

(七十四歳)が愛妻アン夫人と来日された機会に、日本山岳會は六月四日(土)午後四時本會ルームにおいて同氏が一九七六年ウィリー・アンソールド氏と共同リーダーとしてインドヒマラヤの秀峰ナンダ・デビイ(七八一六呎)遠征の折の美しいスライド約八十枚を觀賞しながら当時の生々しい話を聴く機会を得た。

本會はたまたま北京の三國友好登山成功祝賀會と重なり今西會長以下幹部の方々が出席出来なかつたことは遺憾であつたが約二十五名の熱心な會員が名編集長の話を聴くことが出来た。

スライド映画に先立ち吉沢名誉會員よりカーターさんの紹介があり同氏がAAJ及び世界山岳界に貢献された

ことに触れられたが、それ等は「山と溪谷」一九八五年四月号掲載の「忘れ得ぬ人達」で吉沢さんが詳細に述べて居られ、又その概要が、日本山岳會の「山」本年五月号に出ているのでご参照願いたい。

カーターさんは一九三六年弱冠二十二歳の折、英米合同ナンダ・デビイ遠征の途次、船で横浜に着き東京、日光、瀬戸内海、神戸、京都を訪れたのが第一回の訪日で、第二回は一九四五年マッカーサー元帥が横田に到着した直後に軍属(大佐待遇)として食糧補給の状況視察に来日したことがあるので、今回が第三回目であり、アン夫人にとっては最初の訪日であることを話された。

スライドは素晴らしい出来で、十二年の歳月を経過しているにもかかわらず、画面が最近撮影したものと思ふほどで、見ている者が思わず溜息を洩らすほどであつた。

カーターさんよりナンダ・デビイ登攀にまつる歴史的経過とエピソードに付いて左の通り概略の説明があつた。

(一)一八八三年、英國人グラハムが初めて挑戦したが失敗し、以来数多くの挑戦がなされたが何れも失敗に終つてゐる。

(二)一九〇五年、ロングスタッフが、コル(後にロングスタッフコルと名付けた)から初めて内院を見下した。

(三)一九三四年、シプトン、ティルマンの隊が初めて内院に達することが出来た。

(四)一九三六年八月英國人四名、米國人四名から成る英米合同登山隊が、ナンダ・デビイの初登頂に成功した。登頂者はティルマンとオデールであつた。米國隊はハウストンを隊長とし、当時二十二歳のアダムス・カーターも隊員に名を連ねている。

その約一カ月後、堀田弥一氏を隊長とする立教大学

海外の山

とザイルで結ばれた先に新しい仲間がいる、その不思議な緊張と安心を肌で感じた。背すじが伸びる思いがした。

しかし、何より思い出されるのは皆の天真爛漫であり、講習が終わったあとの松永講師のおひげの笑顔である。

急斜面で思い思いにザイルを伸ばしていく生徒たちの間を、駆け登ったり駆け降りたりと、小林講師にも大へんお世話になった。

そして面白かったことは、やはり様な背景をもつ人々と知り会えたことである。冬山の経験を問えばこれまで様々であったようだが、とりくむ視線は皆等しく真剣そのもの。その中にいるとどこからともなく元気が湧いてくるほどに。

また、ラッコのようにしなやかな田部井淳子さんの滑落停止姿勢も印象深かった。

あつという間に下山の時をむかえ、新五合目に着くと道路が開通したのか観光客でにぎわっていた。気さくなメンバーばかりでこれからの計画も楽しみであるが、宿題として残された点多かったように思う。六月の十八日から今度は立山で合宿を行なう。

講師の方をはじめ、計画にたずさわる会員の方々は素晴らしい機会を作ってくれたこと感謝しています。

海外の山

のナンダ・コート遠征隊が初めてヒマラヤ遠征に成功をおさめ、日本のヒマラヤ登山の第一頁を飾ることとなる。

(五)一九四九年、ウィリー・アンソールド(当時二十二歳)が北印度(現在のウッタール・プラデッシュ)で登山活動をしている時たまたま高い山稜よりナンダ・デビイを望むことが出来、その素晴らしい山容に魅せられた彼は、もし将来娘を持つことがあればその娘をナンダ・デビイと命名しようとした。

(六)一九七六年、アダムス・カーターとウィリー・アンソールド率いる米国隊は、一九三六年英米合同隊による初登頂以来四十年目にして北西側より北稜を経て登頂に成功した。登頂者はライカートとロスケリーであった。その折アンソールドの娘ナンダ・デビイが高山病のため、C4で死亡するという悲劇が起きた。立派な体格に恵まれた妙齡の美人クライマーは、男性クライマーに伍して重い荷を担ぎ活躍したが、不幸にも山に召され、このドラマチックな出来事をIMFのH・C・サリン総裁は、彼女はナンダ・デビイの化身となったと語りその死を悼んだ。

これは日本山岳会隊がナンダ・デビイ東峰より主峰に向けてのトラバースに成功した直後の遠征であった。

カーター氏のスライド観賞後、午後六時よりテレビの泉に場所を移し、海外委員早川栄二氏の司会で観迎レセプションが開催され、和やかな雰囲気の中に田口二郎氏

― 剣岳雪上訓練の報告 ―

田中恭子

六月十八日の早朝、バスはまだ自分

の音頭によりカーター氏の健康を祝して乾杯し、吉沢一郎名誉会員よりJACネクタイをカーター氏に、銀のペンダントをアン夫人に贈呈した。

今回の会合が早川瑠璃子、山口節子両会員の格別のお世話により成功裡に終ることが出来た点を付記しておきたい。(吉田 宏)

会員名簿発行についてお願い

今年十二月一日発行を目指して、目下検討中です。ついては、会報送付用帯封に印刷されている住所の正誤、電話番号の変更の有無をお尋ねします。訂正変更の場合は至急本会事務局へ葉書にてご一報下さい。なお名簿は十月末日現在で発行の予定。(総務委)

三国友好登山・会員募金の締切り

今度の三国友好登山は、すでに高承の通り、大成果を収め、終了いたしました。皆様から多大のご支援をいただきました会員募金は、所期の目的を遥かにオーバーし達成することができました。一方ならぬご支援を深く御礼申し上げます。

この栄誉と喜びを共にすることができ、関係者一同本当に嬉しく思っております。ありがとうございました。〔募金額総計九、七〇五、六〇〇円、口数一、九四一・一二口〕(大塚)

次代に残そう美しい山と溪

より高い雪の壁の間をすりぬけて室堂についた。美女平のあたりでは一番咲きの花々が遅い春を告げていたけれど、ここまで来るとまだ厚い雪溪の上を吹く冷たい風に身震いがする。富士山の訓練やその後の準備でお馴染みになった顔や、トレッキングに参加する人達、いろいろの土地からいろいろの経路で十八人が集まった。そして講師の方も富士山でお世話になった松永敏郎さんと小林政志さんが懲りずに来て下さった。

訓練は剣沢上部の文部省の小屋に二泊して行なわれた。最初と最後の日は歩行訓練をしながら小屋まで行くことと帰ることで精一杯だったけれど、それでも重い荷物を背負って急な雪溪を登り降りするのは、復習と仕上げに充分すぎるほどだった。

そして中の一日はまる一日かけて剣沢から平蔵谷をタイトロープで上り、剣に登頂することができた。こう一言で言っても容易なことではなかった。首が痛くなるほど上の方にあるコルの岩を睨んで、固く急な雪の谷を登りつめ、目もくらむような岩場に足をすくませながら必死の思いでたどりついた。最初に着いた人と最後の人とは何十分も差がついたが、皆、心からの喜びに顔を輝やかせていた。来た道を下る。岩場でもたついてい

三国友好登山隊 東京祝賀会

去る六月十七日午後六時より、ホテルニューオータニの鳳凰の間において、東京祝賀会が開かれた。中国側からは李夢華スポーツ相、史占春登山隊総隊長や次仁多吉隊員ら登頂者も含め十六名、ネパール側からはモハメド・モーション観光相、ネパール登山協会会長のカドカ殿



東京祝賀会で鏡開きをする三国の登山隊長たち／読売新聞社提供

下をはじめ登頂者のアン・ラクバ隊員らを含め十四名を迎え、第一部の祝典の部では本会の村木副会長が司会を務めた。

今西寿雄会長は登山隊総隊長として、三国友好、交差縦走、テレビ中継の三つの目的を完全になしとげたことを誇りをもって報告する、と述べ、登山隊総顧問で元外相の桜内義雄氏は三国の隊員が力を合わせて大きな仕事をなしとげたことは、登山の世界だけにとどまらず、これからのアジアの国民の団結と協力をますます促進し、励ますものとなろうと挨拶した。また登山隊の経済的基盤を支え、報道連絡面で尽力のあった後援総顧問の小林与三次読売新聞社長は読売新聞、日本テレビを代表して、今なおテレビで見た登頂成功の感激にまぶたの熱くなるのを覚える、と述べ、関係各位の苦心と努力に敬意を表したいと挨拶した。

このあと登頂成功にともなう記念メダルと賞状が、中国、日本、ネパールの各総隊長に、登山委員会顧問で、読売新聞社名誉会長の務台光雄氏から贈呈された。

ひきつづきカナダのバンクーバーからの竹下登総理大臣のお祝いのメッセージが、司会の村木副会長によって読み上げられ、官房長官の小淵恵三氏がこれを補うかたちで祝辞を述べた。

同氏は、トロントサミットに出掛けている竹下総理に代わって、ちょうど臨時の内閣総理大臣を仰せつかり、これが私の初仕事だ、と参会者を笑わせたあと、日本側の交差縦走者、山田昇隊員がたまたま同氏の選挙区の出で身内でもあることなども交え、ユーモラスに祝辞を述べた。このあと、船田文部政務次官、李夢華主任、モハメド・モーション観光大臣と祝辞が続いたが、ともにこの登山を契機として、各国がさらに友好関係を強めてほし

る私達の最後の一人がコルに降りるまで、先生方は寒風に身をさらしてじっと見守って下さる。急な雪渓を下る。

スタンディング・アックス・ピレーで下りると指示がある。「それどうするんだっけ」、「私、初めてです」という

声に、しょうがねえなあ、という顔で先生方が走り廻って指導される。どなり声が飛ぶ。日が傾いてくる。遅々として進まない。何とその日は十三時間も行動して皆へとへとになり、夕食を

かっこんだ。小屋では老若男女なく皆それぞれに協力して働き、ヒマラヤでの食事のシミュレーションを作って意見を出し合った。私達一人一人の二十

倍は疲れておられるはずの先生方は、小屋でもストレッティングやロープワークを教えて下さったり、行動のことから食事、高山病のことまで、知ってい

ることは何でも全部教えてやろうとばかりに、こと細かに指導して下さった。

今まで教えていただいたことを無駄にしないよう、しっかりと頑張っていたと思います。

苦しい思いをしながらも、いつそう結びつきを強めて、三日間は終わった。室堂でバスを待つ皆の顔は誰もが晴

晴としていた。
※シヴァ峯の報告会は、十月十八日一八時三〇分よりルームで開きます。

三国友好登山隊祝賀会

いと希望を述べた。
第二部の懇親の部は、登山隊本部秘書長の神崎忠男隊員が司会を務めた。

まず三国の南北両側登山隊長六人が声を掛け合ってピッケルで鏡開きを行ない、乾杯の音頭は登山委員会顧問高木盛久日本テレビ社長がとった。

このあと、山田隊員が山頂でかかげた読売の社旗の小林社長への贈呈、当日出席の三国登山隊全員の紹介とそれぞれへの記念メダルの贈呈などが入り、午後八時を少し回ったところで散会となった。
(岡沢祐吉)

北京祝賀会報告

橋本 清

三国友好登山隊の中国祝賀会が、六月三日、午後三時、人民大会堂においておこなわれたが、それに先立ち、李鵬首相、王震国家副主席、楊得志中国登山協会名誉主席による会見が行なわれた。会見及び祝賀会にはネパールからモハメド・モーション観光相、クマール・カドカ総隊長、日本からは桜内義雄総顧問、小林与三次後援総顧問、今西寿雄総隊長、大塚博美実行委員長、村木潤次郎副会長、松田雄一常任評議員、西村政晃常務理事が出席。日本山岳協会より斉藤一男副会長も出席された。会見に引続き栄誉章の授与式が行なわれ、今回の登山の縦走者、登頂者に授与された。なお功労者にも別の章が授与され、式典は無事終了した。

式典に引続き、午後六時より人民大会堂広間にて、成功記念祝賀会が催され、三国総隊長のあいさつがあり、共に三国が協力し合い、今回の登山が大成の内に終ったことを喜び合った。また三国登山隊員も、今回の登山の成功をかみしめるように喜び合った。祝賀会には日

本、中国、ネパールの関係者が六百人も出席し、盛会裡に閉会した。

中国ではこの他、登山隊の下山時の五月二十一日にもシガツエにて盛大な祝賀会が行なわれ、ラサでも同じく五月二十三日、人民政府関係者、チベット登山協会関係者による盛大な祝賀会が行なわれた。

ネパール祝賀会報告

湯浅 道男

三国友好登山隊のネパール祝賀会が、五月二十七日、二十八日の両日、登山隊成功を祝う垂れ幕の林立するカトマンズで以下のごとく開催された。

五月二十七日(午後五時) 王宮においてビレンドラ国王陛下夫妻によるグルカ勲章授与式(日本側)今西寿雄会長、橋本龍太郎名誉総隊長ら十二人、(中国側)史占春総隊長ら七人、(ネパール側)クマール・カドカ殿下ら十九名が叙勲。同日(午後七時)エベレスト・シェラトン・ホテルにおいて観光大臣主催の祝賀パーティ。ビレンドラ国王夫妻、ギャネンドラ殿下夫妻が列席され、各国大使、政府要人が出席し、会場は立錫の余地がないほどの参会者で溢れ、盛会裡に終了。

五月二十八日 午前一〇時(於ヒマラヤ・ホテル)シユレスタ首相によるネパール隊員表彰式。午後三時、NMA事務所祝賀会、つづいて市内パレードをして、午後五時、カトマンズ・パンチャヤット主催の市民歓迎式典(於・市民ホール)。会場は市民で溢れ、橋本龍太郎名誉総隊長、今西寿雄総隊長の式辞をはじめとして、関係者の表彰が行なわれた。

今西会長、大塚副会長、そして橋本名誉総隊長、高木読売グループ代表は、それぞれの関係諸機関の表敬訪

三国友好登山隊祝賀会



図書
紹介

知床を考える

本多 勝一編

一九八六年夏から一九八七年春にかけて、全国を賛否論議の渦にまきこんだ知床国立公園森林伐採問題は、わが国の自然保護運動の歴史に残る大きな出来事であった。不幸にして、この論争は一九八七年四月十四日、林野庁が警官隊に守られつつ二〇〇年をこえるミズナラの巨木にチェーンソーを入れたときに、一応ピリオドが打たれたが、これは終点ではなく、むしろ問題の新たな出発点であった。

この論争の間に自然保護側と伐採推進側とから出された論説、評論、報告等は夥しい数に及んだが、問題の今後の解決のために、一九八六年夏から同年末までに発表された資料を本多勝一氏がとりまとめたのが本書である。本多氏は伐採反対の立場を鮮明に守っていたが、本書には保護側だけでなく、伐採推進の林野庁側の資料も公平にと

問、最終日には、お世話になった日本大使館、日本人関係者を招いて感謝の夕べ(二十九日於・ソルティ・オペロイ・ホテル)を開催して多忙な日程を消化することができた。

それにしても、今西会長が「……これほど喜んで貰えたところに今回の登山の意義があった」と述べられたように、文字通りの熱烈歓迎であった。一度にこれだけ多数の人々への叙勲も初めてのこと、国王ご夫妻、ギヤネンドラ殿下ご夫妻が打ちそろって同一パーティにご出席

り入れられている。なお本多氏は自身でも朝日新聞紙上で、たびたび熱烈な知床保護の論陣をはり、それらの報告が本書に収録されているほか、編集上の「つなぎ」的解説として、レチタチーボ(叙唱)と呼ぶ短文を数カ所にちりばめており、「編」とはいふものの、同氏の知床保護の熱意が全書を通じてよくうかがわれる。

これらの論文、評論、報告等の大部分は朝日新聞と一部は北海道新聞に発表されたものであり、その他いくつかの雑誌に出たものであり、若干のものは本書のために書下したものである。さらに本書のために行なわれた対談や鼎談があり、終りには、営林支局の森林施業計画、各種の自然保護団体が林野庁等に出した要望書などが資料として一括されている。論文篇の寄稿者は三〇名、資料篇のそれは一二名、この多様な論旨の内容を紹介することは、

されたことも異例のことである。市民ホールに集まった市民も登山関係者ばかりではなかった。これまでのNMA行事(エベレスト登頂二五周年記念式典、UIAA総会)のスケールをはるかに上回り、一般民衆の支持と共感に支えられたイベントは、今回が初めてといえるであろう。この登山を支援してくださったすべての方々に、この行事に示された、この登山によって生まれた「ネパールの人々の自信と誇り」をお伝えして、感謝の意を表する次第であります。

この限られた紙数の中では不可能であるが、少数の林野庁側の意見をのぞけば、本書の大部分を構成する論説は、知床森林はどうしても守るべきであるという熱意にあふれている。

さきにのべたように、本書を集録したのは八六年末までであるため、八七年二―三月おこなわれた森林内の野生生物調査及び、それにづく四月の伐採強行に関する見解はでていない。なお本書の発行日が、伐採強行の一日前の八七年四月十三日であるのも奇しき縁か。

ともあれ、これからのわが国の森林、とくに国有林のあり方を考えてゆく上で、またわが国の自然保護運動を進めてゆく上で、知床森林伐採問題は

もっとも重要な出発点となるであろう。その意味で、より多くの会員に本書を読んでもいただければ幸いである。一九八七年四月、晩声社刊、B5版、三四二ページ、定価二〇〇〇円(八木健三)

空撮・世界の名峰

山田圭一作品集

楽しい本、有難い本が出たものである。

おかげで、たとえばイエルパハ主峰以外には名前もわからずにペルーのコノチャ峠から描いてきた私自身のスケッチにある山も、なるほどこれがチコカ、ヒリジャンカかと年来の疑問が

今年もさげしで会いましょう

解決した。

知っている山、まだ見ぬ山、ページを繰るごとに著者の山に対する愛情とそれを表現するための労苦が察せられ、読者の山への憧れが掻き立てられる本である。

保育社版カラーブックス「スイスの山」以来の山田氏の作品の愛好者の一人として、氏の空撮の集大成の出版はご同慶にたえない。

印刷も美事である。エベレスト南西面全景の右頁部下の雪の質感、マカール・西壁やモンブラン・デュ・タキユル東面などの岩の肌ざわりなど、実によく出ていると思う。カナディアン・ロッキーの写真5・6・7などでは地球が作り出した造形美がとらえられている。

またクライマー達にとっては世界の難壁のルートファインディング、幻のクライミングの夢をえがく何よりのものである。

佐貫、杉本両氏の当を得た解説も山田氏の作品の鑑賞と理解を一段と深めるのに役立っている。

それぞれの写真にそえてある英文の説明は、アメリカ大使館のしかるべき米人にチェックしてもらったものだから、良心的な編集ぶりもうかがえる。

しかしカバーと扉に「空撮・世界の

名峰」に相当する英文が入っていないことは何とも惜しまれる。ポストスクリプトとして概説的な英文も入っていることであるし、このようなビジュアルな本はバツと見た時に多くの外国人にわかる文字(英文字)がある程度、ただし要領よく入っていれば別に「完訳版」を作らなくとも「簡訳二カ国語版」として世界で通用し、売上げ部数も一段と伸びるのではないかと思考する。

「ジョーンズ大佐撮影」として入れであるカラコラムの山々、更には天山・崑崙・コーカサスの山々も山田氏のカメラによってとらえられるような世界平和の来る日と今後益々の氏のこの方面でのご活躍を祈ってやまない。

紹介が大変遅くなってしまつて申し訳ないが、好著再評価の機会となれば幸いである。

一九八七年十二月十日、白水社、一四三ページ、定価四八〇〇円

(牧 潤一)

北海道自然一〇〇選紀行

朝日新聞社北海道支社報道部編

朝日新聞社が昭和六十年に全国に呼びかけた「二一世紀に残したい北海道の自然一〇〇選」には六百万通以上の応募があり、その中から候補地を選



深田クラブと

婦懇有志で

長沢和俊氏を囲む会

七月二日～三日に、深田クラブと婦懇の有志共催で、早大教授(東洋史専攻)の長沢和俊氏を囲む会を上高地の小梨平の梓川川畔で行った。

長沢氏は昭和四十一年に、深田久弥を隊長とするシルクロード踏査隊の副隊長として参画し、今ほどブームになる以前のシルクロードをいち早く見聞して来られた、貴重な経験の持主である。小梨平の林間の小鳥の声を耳にしたり、心地よい川風に吹かれながら、当時の深田久弥の旅の中での裏話など、興味深く聴くことができた。

参加者 小倉厚、岡部みち子、熊谷とも子、里見清子、佐藤千恵子、小

塩丘平、外非会員十一名

(小塩丘平)

丁 岳・六月

大橋 克也

靴沈む櫓の朽葉の径踏みて
山静けきも何時までと思うみちのくの踏み跡うすき丁登れば
百咲き辛夷霧に浮べりみちのくの丁の峯の櫓の径の
朽葉靴埋むさあれたまたの日

槍ヶ岳

南 秋 草 子

槍目指す径をよぎりぬ夏の蝶
晴れてゆく霧の広さにお花畠
槍はもう近しとあそぶお花畠
槍ヶ岳一万尺に張る天幕
槍ヶ岳ひとときわ高き大夕焼
手を振れば影も応ゆる御来迎
円虹や槍も穂高も霧の中
雲海の晴れゆく果に富士浅間
満天の星降る中の登山小屋
天の川流れて注ぐ登山小屋

び、朝日新聞記者が直接訪れてペンとカメラで綴ったルポで、六十年十月から六十一年十二月にわたって新聞に連載された。

本書はそれをまとめ一カ所につき二ページにわたる紀行文と見開き二ページのカラー写真、それに問い合せ先や交通の便、案内地図を付した便利なガイドブックでもある。

ちなみに一〇〇選に選ばれた主要山

岳は、利尻山、駒ヶ岳、幌尻岳、夕張岳、暑寒別岳、ウエンシリ岳、カムイエクウチカウシ山、アポイ岳、藻琴山、恵庭岳、峠山、ホロホロ山、鷲別岳、大千軒岳、手稲山、狩場山、ニセコ、羊蹄山等で、それに丘陵、草原、峠、岬、森林、湖、河川、海岸を含めて景勝地を紹介している。

生活に密着している近くの神社山や、何げなく通り過ぎていた羊蹄山麓の泉水源地や噴き出し公園が入っていて、改めて北海道の自然が開発と共にせめめられてるのが感ぜられる。

かつて山仲間の間で峠山だけはガイドブックに載せずにずっと自然を見守っていたと申し合せていたのだが、それがエーデルワイスの咲く山として知られるようになり、ガイドブックに掲載され、いまやアツモリソウやシンバクと共に盗掘され瀕死の状態で、地元営林署では登山者の入林禁止を検討

中で、林道わきに眺望公園を作る計画も進んでいると本書では紹介している。対照的にホロホロ山は従来北側にしか登路が無かったが、南側の白老町から登路を開き、一〇〇選入選のために投票を訴える運動をし五八五票を獲得。入選を記念して大きなカツラの木に彫刻をほどこした標識を山頂に飾るなど、登山者誘致に力を注いでいる所もある。

北海道はいま開発か自然保護かで、知床の森林伐採、日高山脈や大雪山の横断自動車道路の建設、各地リゾート開発による弊害等で社会問題となっている。

自然へのあこがれは都市化が進むにつれますます増大していく。自然は何も遠くにある秘境ではなく、身近な所にもある。北海道にはまだぜいたくな自然がこんなに残っているのかと、思ひ知られる書でもある。

一九八七年五月、北海道大学図書刊行会刊、四二〇ページ、定価一八〇〇円 (高澤光雄)

キャンプ指導の安全と

健康管理

野間口英敏著

アウトドアライフの隆盛に伴い、その一環として様々な形の林間のキャン

プもますますさかんだが、本書は主として青少年のキャンプ生活の指導にあたる人を対象に、その安全と健康管理の面に視点をあて、どんな点にどのよう留意したらよいかを具体的に述べた手引書である。

内容は六章から成る。第一章では、近年におけるキャンプ指導中の事故と傷病の発生状況の具体例三十六件をとりあげている。とくに、昭和六十年中の「キャンプにおける怪我および傷病に関する調査」には、傷病の発生状況、原因、種類、部位、発生時の行事内容等の面よりの考察をし、グラフ化している。

第二章では、キャンプの指導者として、安全と健康管理面で心得ていなくてはならないことを述べる。参加者への「過信」、指導者自身の「油断」と「怠慢」の三項目をきびしく戒めている。

第三章から第六章までは、各章毎にキャンプ指導を計画段階、準備段階、運営段階、事後段階の四つのステップに分け、夫々の段階において、安全と健康管理の上で配慮すべきことを具体的に列挙している。

これらの段階において、一番中心となるものは準備段階と運営段階で、ここに本文百九十一頁中三分の二近い百二十二頁をさいている。準備段階で

は、キャンプの日程、プログラムの決定、指導者の選定、組織づくり、実地調査、参加者の把握、携行品、輸送方法、献立、事前指導、保険等の各項にわたる安全保健面で検討すべきことをあげている。とくに実地踏査でのチェック票の作成をすすめる、そのひな型を示し、参加者の健康管理のための個人票の見本が提示されている。

運営段階では、キャンプ中に行なわれる幾つかのプログラム毎に、点検すべき項目を箇条書にして記述している。内容はキャンプそのもののほかにキャンプファイヤ、水上活動、ハイキング、野外ゲーム、オリエンテーリング、ウォークラリー等にわたる。

全体を通じ、資料として随時掲載されている関連新聞記事のコピーは興味深く、具体性を加え迫力があつた。また、キャンプ中の事故が訴訟となったケースの判例や、ボランティア事故共済制度例、巻末の日本キャンプ協会の諸規定も有用と思われた。

著者は、東海大学で社会体育を担当する先生。日本キャンプ協会の上級指導者でもある。日頃からキャンプ指導の実践に関係されるだけに、行き届いた記述がなされていた。とくに小中高校等でキャンプ指導の任にあたる者は、事前の一読が役立つものと思われる。

一九八七年六月一日、御茶の水書房
刊、一九一ページ、定価一六〇〇円
(一志幸夫)

森はいのち

エコロジーと生存権

宮脇 昭著

ヨーロッパの山に憧れ登山記録を読んでいると、どの記録でも山頂に留まる時間が少ない。そして自分が登ってみてそれが分かった。やはり十分もしたら下ってしまう。山頂には雪と岩しかなく、周りをカメラに収めれば用がなくなるのである。

私たちが普段登っている日本の山は、鋭い頂上でも、なにがしかの植物が一生懸命花を咲かせ、イワヒバリなどの鳥たちが迎えてくれる。私たちはその傍らに腰をおろし、お茶を沸かししばし寛ぎ、花や小鳥と語らうのである。そして見下ろす麓には美しい森がある。

スイスとフランス国境の名もない峠に立って周囲を見て驚いた。見はるかす緑の牧野である。はるか遠くに羊の群れがいる。木など一本もない。そこから少し下って来ると、貧粗なカラマツがひよろひよると生え、粗林となつて里に下りている。

飛行機で日本に帰ってくると、機上

から見る日本の森はもくもくと重なりあっている、安らぎを与えてくれる。その日本の森も、昨今環境が甚だしく悪化し、それがさらに増幅されている。

この本はそれを恐れて、森の人間との関わり合いの歴史から説きおこし、いかにして自然を護り、共存するにはどうするべきかを、こと細かに訴え、方法を論じ、実践を指示している。

生態学者である著者は、原生林を始めてとした、消耗を強要される日本の総ての樹木や森に話を広げ、特に郷土のシンボルであったふるさとの森の破壊を恐れている。例を神奈川にとつて、二五四〇もあった、鎖守の森などの多層群落のふるさとの森が今はたった四〇しか残っていないのを指摘し、環境作りの必要を訴え、さらにそこに適合した樹木を無視した森づくりの儚さを指摘し、森づくりを通して、すべての生物の頂点に立つ人間の、急速に果たさねばならない仕事をこまかく指示している。

この本は山の森よりも、里の森に重点が置かれているが、読み終わって、すべての森は「私たちのいのち」であることと、何をなすべきかが理解できた。一読を期待する。

一九八七年八月刊、有斐閣、一四〇〇円
(渡辺正臣)

思い出の花

佐藤 富美著

誰にでも身近に見られる野の花や、山の花を、一月から十二月まで季節をおって七十ほど紹介している。著者はおそらく山岳会の会員で歌人でもあり、「野草に対する愛情と興味は気違ひじみている」と自身でいっているほど花が好きである。野山を歩いてさまざまな花に出合う喜びが行間にあふれている。山歩きには必ずカメラを持参し、花と語り合いながらシャッターを押す。同じ花でもアングルを変え、季節を変え、花のいろいろな表情をとらえて、その美しい写真も沢山収められている。

一つ一つの花に、名前の由来や俗称、伝説、そしてその花に出会った折の情景もえがかれ、日だまりのあたたかさや、氷雨の冷たさなどが読む者の心に伝わって来る。シラネアオイやウサギギクなどの高山植物の他、オオイヌフグリとかカラスウリ、クズ、サツマイモ、ノギク、ビワ、アカノマンなど、どこにでもある花が沢山とりあげられていて、その美しさに改めて気づかされる思いである。各章毎にその花に因んだ和歌や俳句が添えられている。

著者は自然の中の花を愛し、雑木林が伐採されたり、大事な花が山草マニアに根こそぎ掘りとられたりするのを歎き、栽培された野草のヒロヒョロした姿に心を痛めたりしているが、こういう本が出ることによって、野山に自生する植物の美しさに多くの人が気づいて、自然を大切にすることがひろがっていかれるとよいと思った。

一九八七年十一月二十日発行、A5版、一八六ページ、揺籃社発行、定価二〇〇〇円
(中村あや)

丹沢・桂秋山域の山の神々

佐藤 芝明著

むかし、山案内人は、煮えあがった飯の最初のひとつまみを、必ず取りのけ、山の神へのお供えとした。

集落をぬけ、山道に入ると、山の神の祠があつて、酒と塩が供えられているのを今でも目にするが、山を生活の場に行っている人びとにとっては、山は神聖なところであり、そこに「入れていただく」という、敬けんな心のあかに他ならない。

秩父の栃木には、山の神峠という名の峠があつて、毎年五月十七日には、ご馳走や竹筒に入れた酒を捧げて、山仕事の一年間の無事を祈るため、この

峠に登る習慣が残っている。

著者はそのまがきで、「山神」の宗教的な側面や、学術的な側面の探求や研究やらをしているものではない、としているが、丹沢や道志、桂川南域の山々に五百回以上も入山して、実際に自分の足で歩き、目で確認し、人びとの記憶から次第に忘れ去られている「山の神」について克明な記録としてとどめられた。

本書の内容は、第一部・山神との出会い、第二部・山神に伝わる話、に続いて、第三～五部では、それぞれ西丹沢、東丹沢山塊、桂秋山城と大きく山城を区分し、登山道で見かける山神社、四季折おりの風景、山神の祀られた背景、山道に通じる古道、人びとの往来、地名の起源などについて記述されている。

東京周辺の山々に、登山者のための山道が拓かれたのは僅かに七十年來のこと、その他の無数の山道は里人の交通路か仕事道であって、そこには長い歴史が刻まれている。

その黒土の道に座して、幾百年來この道を往來した山民の、たつきを考えてみるのも、登山者として無益なことではないと思う。

ぜひ、一読をおすすめしたい。

一九八七年十二月、中央公論事業出版制作、丸ノ内出版発売、二五六

1ジ、定価二〇〇〇円

(高田眞哉)



焼岳・平沢利夫

報告

白神山域を探索する山行報告

(山形支部・秋田支部会員との交流をまじえて)

五月二十七～二十九日

主催 婦人懇談会

自然保護委・関塚氏、婦懇委・岡部

さんの立案、口添えで実現された今回の山行であった。萌え出したばかりのブナの樹林帯は、息をのむような美しさであった。参加者一同の胸に深く強く響くものがあつたように想われる。婦懇の山行も今後は出来る限り男性会員の参加を呼びかけてゆきたい。その意味で特にお願ひして、男性会員の赤松光氏に山行報告を書いて頂くこ

とにした。(婦懇委)

参加者 尾崎陽子、岩堀瑞子、宅間清子、早川瑠璃子、大塚玲子、芳野菊子、市吉明子、前田清子、里見清子、赤松光、関塚貞亨、林稔、福田文二、福田光子、北林嘉鶴子、今井和彦(岡部友人)、佐藤和志(福田友人)、講師・工藤茂美、係・熊谷とも子、岡部みち子計二十名

婦人懇談会の白神山域を探索する山行に参加する機会を得、五月二十六日上野発寝台車出羽に乗る。二十七日午前八時秋田駅着、駅前に集合。地元会員の用意された三台の車で国道一〇一号を一路北上。能代市を経て八森町、真瀬林道へ。やがて秋木事業のGATEに着いた。ウワミズザクラが美しい。柳架の舞う辺りはまさに万緑の季節である。人口に膾炙された春秋林道の核心部を徐行で登る。見晴しの利く場所では車を降りて工藤茂美先生の説明をきく。嫺嫺と咲くシラネアオイ、ツバメオモト、タケシマランの群落、研をきそうタムシバ。終点の手前では歩きながらブナ原生林の生態を実地にきく。雪穴の話(樹木根本の雪が春の訪れで円筒状にとける)、ブナ伐採のあと、杉植林地で生ずるダケカンバなどとの混淆林の特徴にも言及され該博な知識を披露される。路肩に残る切り株の年

輪は一〇〇ちかい古株があつた。林道終点から二ツ森山(山473号9ページ参照)に向かう。九四五点から県界を辿り小雪山に登り山頂に立つ。真瀬山、白神岳は指呼の間と言うには鬱蒼とした奥深い眺望であり、三角点の標石は新旧二個、少し離れた位置にあつた。途中、可憐なカタクリの花に歓声があがる。斯くて一行は意がななく下山。初日の宿に向かい長駆して森吉町の民宿山麓荘に着く。夕餉の団欒は和気藹藹の裡に深更に及んだ。

二日目は森吉山をめざしたが天候悪化のため森吉神社(一二七五)で雨を避け、下山に決す。去來する雨雲に見え隠れする山容を後に雪渓をくだり、新設スキー場の伐採地を通る。山麓荘に戻り昼食、次なる宿は夙に名高い秘湯「鶴の湯温泉」、宿の主は本会々員佐藤和志氏。なお福田文二氏、林稔氏、宅間清子氏は合流のため先着され交歓のうちに夜が更ける。

森吉山ではザゼンソウ、ミズバショウ、キクザキイチゲ、サンカヨウなどが人目を引いた。林稔氏の特製スグリ酒は芳醇であつた。

はや三日目、記念撮影のあと、名残りを惜しむ有志で角館町の武家屋敷に。ついで小岩井農場にも寄って盛岡に出た。

この山行を企画推進された婦懇の方

々に礼を述べ、三日間にわたって車を運搬された福田夫人ほか二氏に謝意を表す一方、この貴重なブナ原生林を後世に残し、地域の過疎化と自然界の調和に着目、これを将来にわたって守っていくため、多年尽瘁される工藤茂美先生の情熱には深く魅せられた。

(赤松 光)

大きなブルドーザーが曲りくねった山道に我がもの顔ででーんと坐っていたコンクリートミキサー車も私たちの車を止めてしまった

変な遮断機までが私たちの車をしばらく止めてしまった

そんなこんなで

二ツ森へ登るのに

二時間近くも遅れてしまった

残雪に潜りながら登る視界に

伐採されてしまったブナ林の跡が

あまりにも哀れだったし

追悼

大島永明先輩を偲ぶ

大島永明永年会員(会員番号五一三)は昨年五月転倒して骨折されたのが原因で敗血症を併発、本年二月一日午後二時五十五分、急性心不全のため亡くなられた。享年

やがて伐られるであろうブナ林はもともと哀れであった

今 私に一体何が出来るのだろうか

今 私たちは

何をしなければならぬのだろうか

心にずっしり重い宿題を抱えて

山を後にしたのだった。

(熊谷とも子)

山岳映画の会

フィルム委員会

六月七日(火)六時半より本会集會室において、塚本福治郎会員の作品「厳冬のエベレスト・栄光最後の記録」春雪の穂高を滑る」の二本を鑑賞した。

この映画会の発端は、昨年十月当委員会員の羽田委員が「山の映画あれこれ」と題して講演された際、来会された塚本会員の作品についても触れられ、機会がありましたら是非その作品を上映させていただきたい、という話

になり、それが実現の運びとなり、今回の映画会になったわけです。

四十三名の来会者を迎えて、羽田委員による塚本氏のご紹介の後塚本氏自身が映写機を操作されて映画会は始まりました。

「栄光最後の記録」は一九八二年十二月二十七日厳冬のエベレストに初の単独登頂を果たし、帰路行方不明になった加藤保男氏をフィルムに収めた作品で、「世界冒険とスポーツ映像大会」において優秀賞を受賞された素晴らしい映画です。

一九七三年秋、最初のエベレストで両足の指全部と、手の指の一部を凍傷で失ったものの、強靱な精神力で再起し、一九八〇年春、中国側より二度目の登頂と、輝かしい数々の記録を残した加藤保男氏の三度目のエベレストへの挑戦として初の単独登頂者となった氏の、まさに「栄光最後の記録」となった作品を見ながら、三十三歳という若さでの遭難は、何とも残念なことであり、日本の登山界をリードしていけ

る惜しい人を失ったという思いが大きかった。

加藤氏が、この遠征に出発する前に書かれた「雪煙をめざして」のあとがきに「果して大丈夫だろうか。寒気は、風は、雪崩は……。意識が朦朧とし、気付いた時には進退きわまつていゝるのではないか……。いや、何が何でも帰ってくる。絶対山では死なないぞ!」と書いている。

映画の後半での、下部キャンプよりトランシーバーで「加藤さん応答して下さい! これが最後の交信です! 応答願います!」と叫び続ける臨場感溢れる画面を見ていて、私はこの「あとがき」の言葉を想い浮かべていました。

三十三歳という若さで、どんなにか悔しかったことでしょう。合掌。

上映後、塚本氏より撮影の際の苦労話や、エピソード等貴重なお話を伺い、盛会裡に終会となりました。

来会者 広羽清、松丸秀夫、風見武秀、大塚玲子、羽田栄治、中村久美子、平戸孝夫、田久保勇治、桑原孝博、三好孝弘、河野之保、南川金一、平井吉夫、林桂子、久保孝一郎、岡野修、直田恒夫、柴沼武子、村川八重子、鳴原一男、三枝明德、原謙一、庄健太郎、橋本新子、一方井千里、井東喜代子、遠田栄、遠田篤子、入沢郁

年九十歳三カ月であった。

大島氏は明治四十四年、東京高師付属中学に入学されたと、翌大正元年には我国で初めて学校山岳部が同校に設立され、伴野清会員らと共に部員になられ、在中に日本山岳会にも入会された。正に学生会員の草分けであった。

悼

中学四年の大正三年夏には、一高の伴野先輩らと共に、長次郎谷から剣の第三登に成功した。

また大正五年には伴野氏をリーダーに、大町のガイド大西又吉を伴い七名で、初めて槍から穂高に向う逆縦走にも成功した。

大正七年、大島氏は藤島敏男先輩らと共に四十日間の鮮満支旅行を計画、三十数名で京城、平壤、奉天、大連、北京、漢口、南京、上海、杭州、青島など回って来られたが、この時の体験や認識が、その後の国際的活動などに大変役立つと話して居られた。

清子夫人も山が大好きで、結婚式は一高同級だった黒田正夫・初子夫妻媒酌の下に行なわれた。

後輩にとって大島先輩は穏やかで、よく話も聞かれる慈父のような存在であったが、社会生活では東大法学部卒業後、商工省貿易部で定年まで活躍、その後、貿易振興会に入り、正四位に叙せられて居られる。終戦後も国際工業所有権保護協会日本本部の理事兼事務局長として国際的な手腕をふるわれた。

そして若い時山できたえた体だけあって、晩年も医師がおどろく程の体力で居られた。

山の先達の昇天に際し、心からご冥福をお祈り申し上げる次第である。

(中村純二)

森谷 周野君のこと

森谷君(会員番号二四一〇)は学校(明大)の後輩であるが、私にとっては民俗学の師であった。山岳部に入ってからよく山に登った。特に新潟辺りの残雪期の山に親しんでから、マタギに興味を示し出した。当時は高橋文太郎(故・会員・明大OB)もアチックミュージアムと

いう民俗学団体におられたので、その影響もあったかと思う。

彼と私の親しいつきあいは戦後間もなくからである。新潟鉄道局の旅客課で旅客誘致の仕事をしており、私は都の観光課にいたので年一回のブロック宣伝協議会には必ず顔をあわせていた。会場が新潟県内の時は彼の宅にあそびに行つて、最近の彼の民俗学の論文を見せてもらったりした。彼は新潟の郷土史の研究会に入つて、発表もしていた。

彼は気はやさしくて力持ちのタイプで、酒はすきで、私が新潟へ出張すると、近くにいる山岳部のOBたちを呼んでくれて飲みあかすこともあった。彼の民俗学の方法は柳田さんとはすこし異なった考えで、資料を集めてまとめるというより、自分の目で見て考えるので、正しい資料をとどめるというやりかたで、私もその方法に従っていた。無理に学にすることもないと云う彼の思想に賛成である。

彼はスキーも達人(?)であった。皇族方が県内のスキー場に来られると案内役もしたらしい。

私が佐渡のムジナ伝説を調べるため彼の宅に行き資料を求めたがなかったら、その後二、三度佐渡まで行つてしらべてくれたほど民俗には熱心であった。

鉄道局を定年でやめてから、新潟市内の日本交通公社に入った。山もよく行つていたようだったが、その後、公社の関係する長野県乗鞍岳のホテルのマネージャーにおさまったので、ここでもスキーをぞんぶんに楽しんだことであろう。

今年も年賀状をもらった。だのに彼は逝ってしまった。五月三日、七十四歳。

(小野 幸)

追悼

夫、堀嘉余子、佐藤知恵子、内田耕作、坂本正智、神谷光昭、千葉保之、薬科光雄、斉藤敏男、石橋正美、早川瑠璃子、藤田礼子、渡辺正臣、織田沢美知子、小山睦子 (小山睦子)

福岡支部だより

六十二年度最後の行事として、講演と映画の会を三月十九日福岡市内都久志会館で開催した。

講演は「パキスタン北西辺境の知られざる民族」の表題で本会の高所委員であり、パキスタンに造詣の深い広島三朗氏にお願いした。広島氏の研究・調査に基づく北西辺境少数民族の分布や生活習慣などについて興味深く意のある話を聞くことができ大変有意義な講演会であった。

映画は、一九七七年日本山岳協会が実施した、K2登山隊の記録映画を上映した。参加者は会員三十名を含め百名をこえ盛大におわった。

会終了後、会員二十五名で広島氏を囲んで親睦を兼ね情報交換をした。

(深田泰三)



(7月)

1日 科学委員会講演会

2日 婦人懇談会

4日 会報委員会

5日 海外委員会

7日 学生部

8日 常務理事会

11日 シヴァ登山隊歓送会

12日 海外委員会講演会

13日 理事会

14日 婦人懇談会

18日 総務委員会

19日 図書委員会

20日 山研委員会、三水会

21日 婦人懇談会

26日 自然保護委員会

7月来室者480名

.....
会員異動 7月

物故

久保田昭二(七四四二) 3・15

森谷 周野(二四一〇) 5・3

森田 茂(五一四五) 7・5

浜野 正男(一七三〇) 7・7

山県 一雄(一六八七) 7・25

斉藤 平七(四一〇六) 7・27

平野 勲(八五二四) 7・27

終身会員へ

久我 良房(三三一二)

退会
三菱化成黒崎工場化成クラブ登山班

(五七七四)

姓名変更

加藤裕二(九九一一) ↓鈴木裕二



☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

●図書交換会のお知らせ

日時 十月二十二日(土) 午後二時

場所 日本山岳会 集会室

この催しは、松方三郎さんの提唱で会員同志が不要な山の本を持ち寄り、交換すること始まり、今年で二十一回目となります。

本年も多数のご出席、ご出品をお願いいたします。

△出品申込み方法△

出品締切 十月六日(水)

申込・問合せ 図書委員会

東京近郊の方で多数出品される場合は委員会にて貸しに伺います。または、宅急便で送ってください。

出品図書の販売価格については、特に希望価格の明示がない場合は、委員会に一任させていただきます。

なお、売上げの二割を手数料として申し受けます。

会員各位、とくに山岳図書に関心をお持ちの方のご参加、ご出品をお待ち

しております。

図書委員会

●晩秋の尾瀬山行

静かな尾瀬ヶ原の第二長蔵小屋に泊り、自然を満喫し懇親を深める計画をたてました。

是非ご参加ください。

期 日 十月二十九日(土)

三十日(日)

コース 鳩待峠―尾瀬ヶ原(泊)―尾瀬沼―三平峠―大清水

集合 二十九日新宿駅西口午前七時

費用 一三三〇〇円(往復バス代・宿泊費・懇親会費)

申込先 十月十五日までに事務局へ

参加希望の連絡をいただいた方に詳しい内容をお送りいたします。

集会委員会・自然保護委員会共催

●講演会のお知らせ

日時 十月二十五日(火) 一八時三〇分

講演 「映像の変遷」

―テレビにおける―

山岳撮影の歩み―

講師 川合 周 他、現役カメラマン

(元NHKプロデューサー) 予定

会費 二百円

フィルム委員会で題記の講演会を開

催します。昨年までNHKで活躍されていきました川合さんに、初期の手巻き撮影機時代から現代のビデオ時代までプロデューサー、カメラマンのご苦労や裏話などです。

フィルム委員会

●東北ブロック集会

日時 十月十五日(土)、十六日(日)

場所 栗駒国定公園「いこいの村」

(秋田県湯沢市高松)と高松山群

日程 十五日一四時―一六時集合・受付「いこいの村」(電 0186-79-2100)。

一六時―二〇時、講話・会議・懇親会

十六日、朝食後、A班(登山)、B班(探勝)に分かれて行動。

「A班」マイクロバスにて「いこいの村」七時三〇分発。泥湯―高松岳

(一三四八m)―山伏岳(一三一五m)―川原毛。川原毛発一四時三〇分。泥湯温泉から登り、高松岳・山伏岳を縦走して川原毛に下山(約六時間)、川原毛を散策のあと「いこいの村」に帰ります。

「B班」マイクロバスで「いこいの村」八時発。川原毛―大湯滝―川原毛。泥湯温泉経由で川原毛硫黄山をさらに下って秘湯「大湯滝」を探勝します(往復約二時間)。

参加料 一万円(宿泊料、懇親会、バス代)、当日受付で申し受けます。

申込先 〒010 秋田市山王六―一―五

渡部ビル2階、佐藤事務所内

日本山岳会秋田支部

(電 0186-63-0910)

又は〒010 秋田市保戸野中町七―一四

岡田光行(電 0186-23-3085)

※なお、会場の都合で七〇名になり次第締切らせていただきます。

秋田支部

訂正 会報518号四ページ上段右から十行目、安江守宣とあるのは安江宣氏の誤り。同518号六ページ三段目左一行目の境ノ神山は堺ノ神山の誤り。一ページ一段目左から四行目の「日本山岳会創立会員となった」は「日本山岳会初期会員となった」に訂正をお願い致します。(編集)

昭和六十三年九月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今西寿雄

編集代表 岡沢祐吉

電話 東京(03) 四四三三

振替口座 東京三二四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

印刷所 株式会社 技報堂